

2024年度

学校法人東北学院

事業報告及び決算について

I

事業報告

常任理事（総務担当） 阿部 重樹

二〇二四年度に実施した本院の主な事業の概要について、二〇二五年度第二回理事会（二〇二五年五月二十九日開催）において承認をいただいた学校法人東北学院事業報告書編集委員会編「二〇二四年度事業報告書（二〇二四年四月一日～二〇二五年三月三十一日）」により、各部門の二〇二四年度におけるトピックスを中心にその概要を以下に報告致します。なお、この報告書につきまし

一. 学校法人部門

学校法人東北学院は二〇二五年四月一日施行の改正私立学校法に対応するため関連規定の整備を順調に進めて、二〇二四年十二月十九日および二〇二五年一月二十二日付で寄附行為の改正が認可されました。この改正は、理事

会と評議員会の役割明確化や内部統制システムの整備など、学校法人のガバナンス強化を目的としているものです。なおこの点に関連して、本院ガバナンス・コードの実施状況の点検評価については二〇二四年度も良好な結果でした。

二. 大学部門

二〇二三年度に作成した点検・評価報告書の提出により、公益財団法人大学基準協会による大学評価（認証評価）を受審し、長所二点、改善点二点を含めて適合の評価結果が通知されました。

また、文部科学省「デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業」の補助を受けて二〇二二年度から準備を進めてまいりました、経済学研究科経済データサイエンス専攻修士課程の設置計画について、文部科学大臣から届出受理の通知があり、二〇二五年度の開設が確定しました。

概要を策定し、理系新学部設置に関しては独立行政法人大学改革支援・学位授与機構大学・高専機能強化支援事業の補助対象校として選定されました。

文部科学省の補助事業である私立大学等改革総合支援事業では、四つのタイプの支援対象のうち、本学はタイプ3の「地域社会への貢献（地域連携型）」が選定されました。

三. 中学校・高等学校部門

これまで取り組んでまいりました共学化を伴う学校改革の二つの節目として、東北学院中学校・高等学校では、二〇二四年度は初めての女子の卒業生を送り出すことができました。

また、中高大連携事業において、二〇二四年度からの取り組みと

して中学三年生の工学部実習の実施なども加わり、さらに連携を深めることができました。部活動では、中学校、高等学校とともに、二〇二四年度も大いに成果を上げました。特に、高校陸上部や高校弓道部などは全国大会で入賞をし、また高校サッカー部は三十七年ぶりに全国高校サッカー選手権に出場し、ベスト16の成績をあげることができました。大会出場に際しては多くの皆様からのご声援、ご支援を頂戴したことに心より感謝申し上げます。

四. 榴ヶ岡高等学校部門

二〇二四年度は進学重視型単位制に移行してから二年目を迎え、「個別最適な学び」が実現できる体制の確立を目指して、まず二年度

の理科・地歴公民において、二〇一九年度からスタートしておりますコース制の枠を超えた進路希望に応じた選択科目が展開されました。

また、二〇二五年度から大学泉キャンパス二号館へ移転することから、二〇二四年度の一年をかけて、新しい教育環境の設定とその環境の下で行われる新たな教育活動について、校舎移転委員会を中心に検討を繰り返してきました。こうした検討の成果をふまえて新しく整備された教育環境の下で、更なる教育活動の充実を目指す。榴ヶ岡高校の生徒が大学生のようなキャンパスライフを過ごすことにより、本校がさらに「入りたい高校」として評価される魅力ある高校づくりを目指すこととなります。

五. 幼稚園部門

二〇二四年度に大きく歩を進めることができたものを项目的に列挙いたしますと、①入園児確保にあたって、設置学校及び法人各部署との連携を強化したこと、②満三歳児クラスを独立させ、教員一名を新たに採用し、満三歳児の受け入れ体制を整備を行ったことにより満三歳児の入園希望者が増えたこと、③Grand Vision 150の重点項目「体験教育」の一環として、二〇二四年度は新たに一年のまとめとなる後期の参観日を幼稚園発表会として、この幼稚園発表会を大学五橋キャンパス押川記念ホールにて実施したことが挙げられます。これらの本園教育活動の下で、園児一人ひとりがそれぞれの

成長を遂げたことに喜びと安堵を覚えることができました。一年となりました。

事業報告の最後になりますが、本事業報告書の冒頭に原田善教理事長の挨拶が掲載されております。ここでは急速に進行する少子化を背景とする危機の時代の中にある私立学校に言及されつつ、そうした先の見通せない時代において「社会から選ばれる学校」としての学校法人東北学院の実現を展望しながら、TG Grand Vision 150の第Ⅱ期中期計画に沿って、理事長としての視点から、二〇二四年度の本院全体の歩みが概略的に振り返られています。ご覧いただければ幸いに存じます。

II

決算報告

常任理事（財務担当） 鈴木 勇

二〇二四年度は、開設二年目となる五橋キャンパスの円滑な運用、そして「ひとつのキャンパス構想」の実現を目指して、学部の壁を越えた文理融合の学びの場の整備を行いました。

また、「東北学院大学アーバンキャンパス計画」に従って多賀城キャンパスの売却を完了するとともに、東北学院榴ヶ岡高等学校の泉キャンパス二号館への移転、東北学院大学の課外活動施設の整備などをはじめとした泉キャンパスの活用計

画を着実に推進するなど、大規模事業を無事に完了することができました。

学校法人全体の取り組みとしては、本院の施策を具体的な行動計画に落とし込んだ「Grand Vision 150 第Ⅱ期中期計画（二〇二〇年度～二〇二五年度）」四年目の年であり、これらの計画の実施に際しても、目標の達成に必要な予算措置を着実に行うことができました。

このように、様々な事業計画を成就させてなお、財政的影響は所期の

の予定の範囲内であり、進捗は引き続き順調であります。

本院は、今後とも、当該計画と表裏一体のものとして常に伴走してきた「学校法人東北学院中期財政フレーム第Ⅳ期（二〇二〇年度～二〇二五年度）」に基づく財務統制や財務規律を堅持し、本院の事業を永続的、発展的に維持させるため、健全な財務体制のもとで将来に向けた準備を着々と進めていきたいと考えております。

これらの事業に対する関係各位のご支援とご協力に感謝を申し上げます。二〇二四年度の決算につきまして、

【事業活動収支計算書】

二〇二四年度決算の概略につきまして、学校法人の当該会計年度の収支状況を示す「事業活動収支計算書」に基づき説明いたします。

《教育活動収支》

まず、教育活動収支について、教育活動収入計は、二〇二四年度補正予算（以下、「補正予算」という。）に比べて約一億千六百万円の収入増となり、約百九十五億五千二百五十九万円となりました。

教育活動収入の中で最も大きな割合を占める学生生徒等納付金は、ほぼ補正予算どおりの約百五十五億三千五百九十六万円となりました。

手数料は、補正予算と比べて約二千五百万円増の約三億六千二百八十八万円となりました。

これは主に、各設置学校で補正予算編成時に想定した志願者数を上回ったことに伴う入学検定料の増によるものです。寄付金は、特別寄付金及び現物寄付金において、補正予算と比べて約三千二百二十一万円の増となりました。

経常費等補助金は、主に大学部門の私立大学等経常費補助金について、補正予算と比べて約七千二百三十一万円の増となりました。

増となりました。

教育活動支出の中で最も大きな割合を占める人件費は、補正予算と比べて約三千九百六十五万円増の約八十九億三千五百三十一万円となりました。

教育活動支出計は、補正予算に比べて約一億九千四百十四万円の支出減となり、約百八十四億九千二百三十三万円となりました。

教育研究経費は、主に消耗品費、光熱水費、旅費交通費及び委託費などにおいて、各部門が節約に努めた結果、補正予算に比べて約一億九千五百十一万円減の約七十九億七千四百六十一万円となりました。

管理経費も教育研究経費と同様の理由により、補正予算に比べて約三千八百六十八万円減の約十五億八千八百三十一万円となりました。その結果、教育活動収支差額は、補正予算と比べて約三億四百十九万円増の約十億六千三百三十六万円の収入超過となりました。

《教育活動外収支》

教育活動外収支差額は、受取利息が予算編成時に見込んだ額より増加したことなどにより、補正予算と比べて約九千九百一十万円増の約一億八千二百五十万円となりました。

《経常収支差額》

教育活動収支差額と

その結果、特別収支差額は、補正予算と比べて支出超過が約二千二十八万円減少し、約七億六千五百二十八万円の支出超過となりました。

《基本金組入前

基本金組入前当年度収支差額は、補正予算と比べて約三億四千三百三十八万円増の約四億七千八百五十八万円の収入超過となりました。

《基本金組入額合計》

基本金組入額合計は、補正予算と比べて約二億二百七十五万円増の約二十七億四千九百二十二万円となりました。

《翌年度繰越収支差額》

累積の収支を示す翌年度繰越収支差額は、支出超過が約二億四千三百四十二万円改善し、全体として約九十九億六千四百四十万円の支出超過となりました。なお、この支出超過は

LIFE LIGHT LOVE